**藤木　倶子 （ふじき・ともこ）**

**１、プロフィール**

俳人。村上しゅらに資質を見出され、翌年しゅらが発行人を務める「北鈴」と小林康治主宰の「泉」に入会。その後、康治の「林」創刊に従い入会。康治の死後「たかんな」を創刊、主宰。風土を叙情豊かに詠む俳人として評価が高い。

＜生没＞

1931(昭和６)年７月21日～2018（平成30）年10月25日

＜代表作＞

第一句集『堅香子』（昭和57）以降第十一句集『星辰以後』（平成31）まで句集は11冊。他に『私の歳時記・貝の歳時記』（昭和63）『恋北京』（平成３）などがある。

＜青森との関わり＞

八戸市に軸足を置きながら、中国との国際交流や日本全国の俳人や結社と俳句交流を行い、県俳壇のレベル向上に貢献した。

**２、作家解説**

1931（昭和６）年、青森県八戸市に生まれる。

昭和52年、実家である「吉田産業」の職場俳句会「日新俳句会」に顔を出したのがきっかけとなり、指導に来ていた村上しゅらにいち早く才能を認められた。翌年、風土俳句の拠点として全国に名を馳せていた「北鈴」に、また石田波郷の流れを汲む「泉」に、どちらもしゅらの勧めで入会する。昭和56年に北鈴新人賞を受賞。その後、「泉」を出た小林康治が創刊主宰した「林」に入会。作句歴５年で第一句集『堅香子』を上梓する。昭和59年には第一回林俳句賞を受賞する。

昭和63年、句文集『わたしの歳時記・貝の歳時記』を発行。

平成４年、小林康治が死去し「林」は終刊となる。翌年「たかんな」を創刊、主宰となる。「林」から引き継いだ会員も多く、構成員は全国的に散らばる。

平成７年、たかんな訪中団を組織して北京を訪問し「日中俳句・漢俳交流会」を共催する。平成９年、たかんな５周年記念大会に劉徳有氏を記念講演に招く。平成14年、有馬朗人氏を講師に招く。15周年に鷹羽狩行氏の講演。知名度や交際の広さを生かして、積極的に「たかんな」と青森、八戸を全国に発信し交流に努めた。

毎日新聞社刊『俳句あるふぁ』「現代俳句の300人」に選ばれたほか、「古今秀句80」には〈あかつきの雲割る声や白鳥来〉の句が採用された。角川学芸出版『極めつけの名句1000』には〈えんぶりや雪の鍛冶町大工町〉と〈年の市まぶしきものの売られけり〉の２句が掲載された。

平成13年に八戸市文化賞を受賞。俳人協会の評議委員を始め、数々の役職を持ち、県内外の俳句大会の選者を務めた。平成30年５月、句集『星辰』により「文學の森大賞」を受賞。同年７月、「たかんな」の名誉主宰に就任し、10月25日に八戸市内の病院で逝去した。句碑は八戸市の八戸公園内に〈無垢の瞳となり寒林を出できたる〉が１基ある。

句集は『堅香子』『雁供養』『狐火』『竹窗』『栽竹』『火を蔵す』『淅淅』『清韻』『無礙の空』があり第十句集の『星辰』は平成28年に刊行された。平成31年には、辞世の句までを収めた第十一句集『星辰以後』が刊行されている。著書は他に『自註現代俳句シリーズ・藤木倶子集』『自解100句選　藤木倶子集』『花神俳句館　藤木倶子』などがある。